

---

# 死神に涙を...

やまじゆう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神に涙を…

### 【Nコード】

N2546Y

### 【作者名】

やまじゆう

### 【あらすじ】

死神の洗礼を受ける代償として《涙》を棄てた死神アリス。

彼女は、《願い事》を叶える為、《命の宝石》を集める毎日を送っていた。

ある日、アリスは辺境の村で謎少年トイと出会う。

そして、二人の物語は始まる…。

## 第一話？

【第一話？】

その死神は涙を流さない。それは、彼女が涙を棄てたから…。

・  
・  
・  
・

「母さん！」

「お義母さん！」

「お婆ちゃん！」

雪が深々と降り積もる真夜中、一人の老婆が息を引き取った…。

家族に見守られながら、彼女は八十余年の人生に幕を下ろしたのだ。

安らかな死に顔だ。

突然、フワッと老婆の枕元に黒髪の少女が現れた。

少女は自分の背丈以上もある《大鎌》を左手に持ち立てている。

やがて、老婆の亡骸から小さな光の玉が浮かび上がって来た。

少女は、鉛玉サイズの光の玉の緒を大鎌の刃で切ると、その玉をそっと手に取り、腰にぶら下げた皮巾着の中に丁寧に仕舞い入れた。

依然として、老婆の家族は彼女の死に嗚咽している。

彼らには少女の姿が見えていない。当然、この場で少女が行なった《行為》についても、誰一人として気付く者はいない。

少女の名は《アリス》。職業は《死神》。

死を迎えた人間の身体から浮かび上がる《命の宝石（魂）》を回収し、無事に冥界へ送り届ける事が、死神の仕事の一つである。

今日もアリスの携帯電話に、《死神公社》からの《死亡予定者リスト》が送信されて来るのであった。

死神公社は冥界を所在地とする為、死神達は、基本的に死神公社の契約社員として活動しているのである。

アリスは携帯電話を片手に、並木通り沿いの喫茶店へと出向いた。

カラン…

「いっしょにしゃいませ」

痩せ型で背の高い三十代後半のマスターが軽い笑顔で出迎えた。

「いつものですか？」

マスターがそう尋ねると、アリスは無言で頷いた。

アリスは決まって、店の一番奥の席に着く。

何故か、テーブルの真ん中には髑髏の置物が置いてあり、気味悪がって誰も座らないので、いつしかそこはアリスの指定席となっていた。

「お待たせしました」

マスターは、特大フルーツパフェをアリスのテーブルの上に置いた。

アリスの唇が微かに綻んだ。

アリスがこの店に通っている理由の一つは、このフルーツパフェが目当てであった。

冷たい濃厚なアイスクリームにふんわりと甘い生クリームを乗せ、旬の果物をトッピングしたフルーツパフェは、絶品としか言い様がない。

アリスはこれを食べている時が、一番幸せを感じるのである。

アリスはパフェを味わいながら、付近に座るマダム御一行の話し声に耳を傾けた。

「イマワリ村の村長さんのお母様が亡くなったそうよ」

彼女の命の宝石は、昨晚アリスが回収済みだ。

「時計屋の旦那さん、また浮気がばれて、奥様が実家へ帰ったそうよ」

懲りない男だ。

「大通りの角に、新しくクレープ屋さんが出店するそうよ」

それは要チェックだ。

暫くの間、マダム達の世間話に聞き耳を立てていたアリスだったが、気が付くとパフェグラスの中は空になっていた。

アリスがこの店に通うもう一つの理由は、店の客から様々な情報を聞く事が出来るからである。

今や、死神の仕事は、《情報戦》といっても過言では無い。

如何にして、迅速に且つ最小限のリスクで命の宝石を手に入れるかが決め手となるのである。

出遅れては、他の死神に先を越されてしまうのだ。

死神の世界も、弱肉強食なのである。

アリスは、携帯電話を開き、死亡予定者リストのページを開いた。

既に、殆どの命の宝石の回収役が決まっていた。

アリスは、完全に出遅れてしまった。

「そう言えば、北のラボラト村が野盗に教われたそうよ。怖いわねえ」

その時、アリスはピンと来た！

村が丸ごと野盗に襲われたという事は、多くの犠牲者が出たに違いない。あわよくば、命の宝石がまだ残っているかも知れない。

アリスは、ラボラト村に於ける命の宝石の回収状況を検索してみた。

やはり、アリスが睨んだ通りであった。野党に襲われた辺境の村は危険が伴う所為か、回収率が非常に低い。

喩え、特殊能力を持つ死神といえども、致命傷を負えば死んでしま  
うのである。

アリスは身仕度を整える為、一旦自宅へ戻ることにした。

・  
・  
・

・  
アリスが住むマンションは、築一年の鉄筋コンクリート五階建てである。

部屋の広さは2LDK。一人で住むには広過ぎるくらいだ。

アリスの部屋は、四一号室の角部屋なので、日当たりは良好である。

アリスは他の住人の事は一切知らない。家族は何人か、職業は何か…等々。

時々、擦れ違い様に軽く会釈をするだけで、顔すら覚えていないのが現実だ。

彼女は、人との接触を極端に嫌う。

それは、死神という職業柄か、敢えて人を遠避けているのか、それとも、彼女自身の過去に、何かトラウマとなる理由があるのか…。

それは、本人のみが知る事であろう。

アリスは、シャワーを浴び、死神の制服に着替えた。

死神の制服は一般的に、男性は黒のタキシード、女性は黒のゴシックドレスである。

一応、黒を基調とした正装である事が決まりとされている。

アリスのお気に入り、黒のひらひらゴスロリ・コスチュームである。

クローゼットとして使用されている八帖の洋室には、ゴスロリ・コスチュームが所狭しと吊るされている。

アリスは全ての仕度を整えると、黒いコートを羽織り、部屋を出た。

「寒……」

外へ出た途端、冷たい風がアリスの頬を掠めた。外では雪が散らついている。

マンションを出て路地を曲がると、繁華街へと続く大通りに出る。

そこから、路面電車で揺られて約三分。《都市外壁北口》へ到着した。

どうやら、この停留所で降りた乗客は、アリスだけの様だ。

薄く覆われた白い地面にブーツの足跡を残し、アリスは外壁出入口へ歩き出した。

・  
・  
・  
・

ベルフィナス王国領デルタエンド・シティ。

その名の通り、王国領最果ての都市である。

人口は約三万人。王都ベルベットに次いで国内二位の都市だ。

北西側が海に面している為、漁業の他に貿易も盛んに行なわれている。

海外の様々な文化が入り込んだ所為か、いつしかこの都市独自の文化が作り出される様になった。

アリス愛用のひらひらゴスロリ・コスチュームも、この都市ならではのファッションだ。

別名アキバチック・ファッションとも言われている。

アリスがこの都市に定住を決めた理由は、デルタエンド・シティが貿易都市として、諸外国からの情報が入り易いという点である。

死神の洗礼後、世界中を渡り歩いたアリスが、やっと見つけた理想の土地。

いつか去らなくてはならない時が来るまでは、この都市に居続けたいとアリスは思っているのだ…。

このデルタエンド・シティは大きな三角形の形をしている。

都市の外周を取り巻く外壁の高さは九メートル。

都市の外壁がこうも高い理由として、諸外国からの侵入を防ぐ事は勿論の事、それ以上に外界に棲息する《天敵》から都市を守る為に言っても過言ではない。

これはデルタエンド・シティに限らず、世界中に点在する殆どの都市や村は、天敵から身を守る為、電子結界と外壁によって囲まれているのである。

最近では空からの侵入に備えて、ドーム型の外壁を利用する都市も目立ち始めた。

「お嬢さん、今日はこの雪の影響で、《武装バス》の運行は中止になりましたよ」

足早に歩くアリスに、外壁警備官の青年が声を掛けて来た。

外壁警備官には天敵の侵入を想定して、王国騎士団所属の騎士が就く事になっている。

アリスは青年騎士の呼び掛けにも応えず、黙々と歩き続けている。

「ちょっと君、武装バスは走らないんだよ！」

青年騎士は、自分の呼び掛けに無反応な少女の小さな肩を掴んだ。

アリスは振り向くと、青年騎士に対し、冷やかな視線を送った。

「大丈夫。私、死神だから…」

「え…?」

アリスの身体は、フワツと浮かび上がり、外壁に沿って上昇した。

そして、その姿は徐々に消えていったのである。

青年騎士は、その光景を呆然と見つめた。

「初めて見た。死神…」

死神という職業は、人々から認知されてはいるが、社会的に余り受け入れられてはいないのが現実である。

『死んだ人間の魂を拾い集めては、金に換える卑しい職業』という考えが根強いのだ。

その為、多くの死神達は身分を隠し、人里離れた場所でひっそりと暮らしている。

その一方では、『死者の魂を天敵から守る魂の守護者』と敬われる事もある。

何とも身勝手な話であろうか。

アリスは、外壁の天辺てっぺんに腰掛けて、外界を眺めていた。

そこから観る景色は、一面が真っ白に覆い尽くされた世界が広がっ

ていたのである。

道も草木も湖も何もかもが、真っ白な雪に埋め尽くされている。

これでは武装バスは走る事が出来ない。

《対天敵用武装型装甲バス》。通称、武装バス。都市間移動手段の一つ。

凶暴な天敵が棲息する外界を移動する為に、生身ではかなりの危険が伴う。

そこで登場したのが、武装バスだ。

三　ミリ特殊チタン製の装甲板に二四　ミリキャノン砲を装備。まるで、大型の戦車である。

乗客定員は一　名。都市間の移動には、武装バスは欠かす事の出ない乗り物である。

最近では、拡散粒子砲を装備している武装バスも運行しているという。

アリスは両手を大きく広げると、外壁の天辺から静かに飛び降りた。落下して行くアリスの身体に、冷たい空気が風圧となって纏わりつく。

アリスは地面擦れ擦れの所で、垂直落下から水平飛行に切替え、雪面の低空飛行を楽しんでいる。

風と共に粉雪が舞い上がり、キラキラと眩しく光り輝く。

誰もいない真っ白な世界を自由に飛び回る事が出来るのは、死神の特権だろうとアリスは思う。

アリスは、更に飛行速度を上げ、北のラポラト村を目指した…。

【第一話？〜了〜】

## 第一話？

### 【第一話？】

アリスは、北のラボラト村を目指し、真っ白な雪に覆われた雪面を擦れ擦れの所で水平飛行を楽しんでいた。

その時、前方の雪面に亀裂が生じた！

その亀裂は徐々に広がり、地中からは巨大な鞭に似た二本の触手が飛び出して来たのであった。

その触手は地面を捲り上げながら、アリス目掛けて襲って来た！

アリスは翻りながら、何とかその触手をかわ躲した。

そして、土と雪が入り混じった粉塵を上げながら、触手の本体は巨大な姿を地上に現したのである。

体長二メートルはあろうかという植物型の天敵は、その巨大な触手ヒック・マンイーターをアリスに対して、容赦なく振り落とした！

粉塵が舞い上がる中、アリスは触手による攻撃をことごとく躲すのであった。

そして、飛行速度を上げ、遙か北の空へ飛び去ったのである。

獲物を逃し、取り残された天敵は、再び地中の奥深くへと姿を消した…。

死神にとって、飛行行動は意外と体力を消耗するのである。

況<sup>ま</sup>してや、今の様に思いがけないトラブルに遭遇した事もあり、アリスの体力はガス欠寸前であった。

ふと見上げると、アリスの目の前には、大きな森が広がっていた。

ラボラト村は、この森を抜けた所にある。

しかし、アリスはここで大きな問題に直面した。

森を迂回しようにも時間が掛かり過ぎるし、森を飛び越えるにしても体力が保たない。

アリスは大きな溜め息を吐いた後、歩いて森を抜ける事を決心したのである。

肩から斜めに掛けた小さなショルダーバッグの中から、一口サイズのチョコレートを一つ取り出すと、それを口の中に入れた。

甘い香りが口の中に広がる。

至福の時だ。

アリスはチョココレートの残り香を感じながら、木々が生い茂る薄暗い森の中へ足を踏み入れた。

まだ昼間だというのに、森の中は暗く、薄気味悪い程にしんみりとしている。

辛うじて、木々の葉の間から射し込む木漏れ日を頼りに歩く事が出来る位だ。

・  
・  
・  
・

どの位歩いたのか…？アリスは、首からぶら下げた金の懐中時計を開けて見た。

森に入ってから、既に二時間も経っている。

アリスはチョココレートをもう一つ口に入れた。

遠くの方に、光がチラチラと見え隠れする。

その光は徐々に、アリスの方へ近付いて来る。

光の正体は、懐中電灯だった。人影も見える。

「おい、だれか居るのかーッ!?」

男の人影がだんだんと近付いて来る。

「こんな所に女の子が一人で、何をしてるんだ？」

男が懐中電灯をアリスの顔に向けながら、話し掛けてきた。

しかし、アリスは最初からこの男に対して違和感を感じていた。顔の皮が異常に弛たるんでいるのだ。

「迷ったのなら、付いて来るといい。俺の村はこの先だから」

この先は野盗の襲撃に遭い、全滅したというラボラト村しかないというのに…。

この男、益々怪しい。

(…パフェ…)

次の瞬間、男は自らの生皮を引き裂き、獣としての本性を露あらわにしたのである！

獣人型の天敵<sup>ワー・ウルフ</sup>。人の生皮を被った狼男だ。

恐らく、ラボラト村で殺害された村人の生皮を剥いで、それを被っていたに違いない。

天敵は、その鋭い牙を剥き出して、アリスに襲いかかった！…が、次の瞬間、天敵は何故か身体を硬直させ、身動きすら取れずにいた。

何と、アリスは瞬時に天敵の背後へと回り込み、彼女が愛用する大鎌（愛称・パフェ）の刃を天敵の首元に当て付けたのだった！

「死神：！？」

天敵は生唾を飲み込む。

死神のもう一つの顔……。それは、《天敵狩り》である。

死神は、その特殊能力を以て、天敵を狩る事が出来るのである。

つまり、死神は天敵にとっての《天敵》なのだ。

「…君を排除するから」

見た目の可愛さとは裏腹に、アリスが発した冷酷なまでの台詞が、天敵が耳にした最期の声だった…。

断…！

・  
・  
・  
・

アリスは、更に三分程歩き続け、やっとの思いで森を抜け出す事が出来た。

外は既に日が暮れていた。

アリスの目の前には巨大な壁が立ち開はだかっている。ラボラト村の外壁だ。

デルタエンド・シティ級の外壁である。しかも、最新型二重構造のおまけ付だ。

果たして、辺境の村に、これ程の厳重な警備体制が必要なのか？

この設備費用だけでも、相当な金額である事には違いない。

様々な疑問を胸に秘め、アリスは村への入口を探した。

入口は難なく見つかったが、さすがは最新型。オートロック方式の為、ID番号を入力しないと開錠出来ない仕組みになっている。

しかし、アリスは死神である。壁を通り抜けることが出来る特殊能力の持ち主だ。

外壁を通り抜け、村への侵入を果たしたアリスが、最初に目にした光景は凄惨たるものだった…。

村の至る所に死体が転がっており、野盗による襲撃の残虐さが伝わってくる。

アリスは村中全ての死体を調べたが、どの死体も既に命の宝石が抜き取られていた。

天敵に食われたのか、それとも、他の死神が持ち去ったのか…？

アリスは広場の噴水の縁に座り、腰にぶら下げた皮巾着を外し、中の命の宝石を数えた。

(二八個…)

アリスは両膝の上に頬を寄せ、深い溜め息を吐くと、天を仰いだ。

死神は元々、どこにでもいる普通の人間である。

この世界では、『一 万個の命の宝石を集めた死神は、どんな願い事も叶えられる』と言い伝えられている。

欲深い人間達は、死神公社で死神の洗礼を受け、我先にと命の宝石を集めた。

ある者は国王に。ある者は巨万の富を。またある者は永遠の若さを。人間の欲望は尽きる事を知らない。

アリスもまた、どうしても叶えたい《願い》の為に、命の宝石を集めている。

しかし、得る物があれば、失う物もある理の中、死神の洗礼をする為には《代償》を支払わなくてはならない。

その中には、片目を失う者や内臓や片手・片足を失う者さえいる。

それでも尚、自らの欲望を手に入れたと思う人間の執着心には感服させられる。

アリスが死神の洗礼を受けるに当たって、支払ったもの…。

それは、《涙》だった。

彼女はもう、泣く事はないのだ…。

いつの間にか、雪が止んでいる。

その時、噴水に張られた氷がピキピキと音を立てて、ひび割れ始めた。

アリスは咄嗟にパフェ（大鎌の愛称）を召喚し、身構えた。

彼女は意識を集中させ、周りの気配を感じ取っている。

足音はするし、気配も感じる。しかし、敵の姿が見えない。

姿を消す事が出来る、新種の天敵だろうか？そうだとすると、少し厄介だ。

幸い雪が降ったお陰で、相手の足跡が判る。少し小さめの足跡だ。

アリスも姿を消し、敵が動く度に付く足跡と気配を辿った。

そして、一瞬の間隙を突いてパフェが《それ》を捉えた。

敵は徐々に、その姿を露にする…。

パフェを握るアリスの手に力が入る。

「うっ…、ごめんなさい。脅かすつもりはなかったんだよ…」

何と、敵の正体は七、八才位の男の子であった。

その円まらかな瞳には、涙が滲しみんでいた。

アリスはパフェを異空間へ仕舞い込むと、再び男の子に視線を向けた。

「う、ごめんなさい…」

今にも泣き出しそうな男の子を見て、アリスは小さく溜め息を吐いた。

「もういい、泣かないで」

男の子は小さく頷うなづいた。そして、人差し指を口に咥くはえたまま、アリスの腰にぶら下がっている皮巾着をジーツと見つめた。

「飴玉…?」

どうやら、先程アリスが命の宝石を数えていた時に覗いていた様だ。

アリスは男の子に、飴玉ではない事を説明すると、途端に男の子の表情は曇った。

「お腹、空いてるの？」

アリスが尋ねると、男の子は小さく頷いた。

アリスはバッグの中からチョコレートの一つ取り出し、男の子に手渡した。

男の子は初めて見るチョコレートに見入っている。そして、口の中へ一気に放り込んだ。

口の中でトロ〜ンと広がる甘さに、男の子は満面の笑みでアリスを見上げた。

アリスは男の子の無垢な笑顔に唇を緩ませた。

・  
・  
・  
・

「君は誰？」

「僕はトイー」

「何故、消える事が出来るの？」

「うーん、分かんない」

「ここで、何があったの？」

「分かんない。朝起きたら、みんな死んでたんだ。お母さんも…、おじちゃんもおばちゃんも…、僕を残して、みんな…死んじゃったんだ…」

トイーの瞳から大粒の涙が零れ落ちてきた。

アリスは、やれやれといった表情で、再びチョコレートを一つ手渡した。

そう言えば、他人とこんなに会話をしたのは久し振りだ。アリスはふと思った。

これまで、極力他人との関わりを拒み続けてきたアリスだったが、今こうして、トイーと話していて、『こんなのも、悪くはないな』と思う自分がある事に気付いたのである。

「お姉ちゃん、こっちこっち！」

トイーが、ひらひらスカート裾を引っ張る。

アリスは仕方なく、トイーの後を付いて行った。

村の端っこに建つ、ボロボロの掘っ立て小屋の床下に、隠し扉があった。

トイーが扉を開けると、モワツとした空気と共に異臭が漂ってきた。

アリスは思わず顔をしかめ、口を押さえた。トイーは平気な様だ。

「ここは？」

「僕の寝室だよ！」

この隠し部屋のお陰で、トイーは野盗や天敵の襲撃から身を守る事が出来たのだとアリスは確信した。

中は真つ暗だ。アリスは懐中電灯を点けて、周りを照らした。

室内は八帖程の広さで、元々は地下倉庫として使っていたらしく、棚がやたらと多い。

部屋の隅にはベッドが置いてある。どうやら、トイーの寝床の様だが、既に誰かが寝ていた。

トイーの他に、生存者がいたのだろうか？

アリスはベッドの人影に懐中電灯を照らして見た。

「…！」

これではつきりした。

この部屋の中に充満している異臭の原因が、ベッドの上で横たわっている女性の死臭であるという事を。

「お母さんだよ!」

トイーはベッドに潜り込んだ。

「夜は寒いけど、お母さんが抱いてくれるから暖かいんだあ」

彼は、恐らく昼間は食料を探し求め、夜になると、母親の遺体に包くるまり、寒さを凌ぐ。

こうして、何日も独りで生きて来たのだろう。

幼いこの子にとって、それがどんなに辛くて、寂しくて、不安な事が想像すらつかない。

アリスは、無邪気な笑顔で話すトイーの身体を強く抱き締めた。そして、耳元で囁いた。

「一緒においで」

「お姉ちゃん…?」

「私とおいで」

「でも、お母さんが居るし、村のみんなだって…」

「君のお母さんは死んだの。村の皆も死んだわ。君はここに居る必要はないし、理由もないの。…だから、一緒においで」

「…いい、いいの？…僕もお姉ちゃんと一緒に行って…、いいの？」

「うん。一緒に、来て」

アリスの温かい優しさを感じたトイーは大声で泣いた。ずっとならずと、泣き続けた…。

・  
・  
・  
・

これが、アリスとトイーの物語のはじまりである。

これから、二人はそれぞれの《願い》を叶える為、様々な困難に立ち向かう事になる…。

【第一話？～了～】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2546y/>

---

死神に涙を...

2011年11月5日21時09分発行